

アイデアが生まれ、磨かれる場

議論のアリーナ



研究のアイデアの多くは議論から生まれ、議論の中で磨かれます。ここでは地域研究会とアジ研パワーランチという全所的な議論の場と、諸々の自主的な活動のなかからその一部を紹介します。

自由な議論の土壌を育む ～地域研究会～

地域研究センターの有志が幹事となって、毎週水曜日午後3時から開催する集まりです。市ヶ谷時代は調査研究部の「部内研」と呼ばれ、部員は毎回参加し、年1回は報告することになっていました。「研究者はたたいて育てる」のが常識で、詰めの甘い報告には参加者が厳しいコメントを浴びせました。報告者だけでなく聞く人にとっても、研究の鍛錬の場でした。

部内研の活性化に貢献したのが、農林事務次官や政府税制調査会会長を歴任し、アジ研の所長や会長も務めた小倉武一元会長です。1990年代後半に参加者が減った時、幹事だった星野妙子さんが相談に行ったところ、多忙にもかかわらずこまめに報告を聞きに来てくれました。1999年には「戦前の東大のセツルメント」について自ら報告しています。キューバの製糖業に関する報告を聞き、報告者の星野さんが屋久島で製糖業をみられるように便宜を図ったこともあったそうです。

幕張に来てからは「地域研究会」に衣替えし、研究に限らない幅広いアイデアを議論する場となっています。コロナ禍でもオンラインで継続していて、内部研究者の半分近くが参加することもあります。自由な議論の土壌を育む場として、これからもにぎわってほしいと願っています。(清水 達也)



地域研究会の前に雑談する小倉武一元会長(右)と星野妙子さん(左)。

日本の発展をたどる ～盛衰産業研究会～

この研究会が活動したのは1986年です。前年夏、小島麗逸さんからシニアの研究員の休暇を利用した講演旅行に、海外派遣前の若手研究員が、日本を「勉強」するため、随行的なことが契機になりました。

若手中心で自主的に企画された研究会では、みな休暇をとって、小島さんに縁の深い山梨県と長野県の成長産業と衰退産業をあわせて視察しました。前者の一例が精密機械工業で、オルゴールからマイクロ・モーターへの技術展開は、当時よく唱えられていた発展段階といった考え方を印象付けるものでした。他方、後者の一例は飯田市の組合製糸でした。横浜シルクセンターに事前「勉強」に赴いたメンバーの1人は、なぜか絹製の禪を持ち帰りました。

最後に訪れた龍山村(当時、現浜松市)では、林業組合による地域活性化事業を視察し、美林を守るため地元で雇用創出という発想を目の当たりにしたものです。帰途、インターでうっかり東京とは逆方向にハンドルをきった小島さんの車両を見送り、フィールドワークを終えました！(望月 克哉 / 東洋英和女学院大学 国際社会学部)



製糸工場を見学中

経済学者の小さな巣

アジ研では経済学者は比較的少数派ですが、熱い集まりが15年間続いています。それは経済学主要誌の最新論文のエッセンスを週替わりで順に議論するリーディング・グループ。私と、2006年に一緒に入所した高橋和志、高野久紀、湊一樹が同年初秋に始めました。アジ研という勤め先を得られはしたものの、どう歩むべきか、みな悩んでいました。

食堂や研究棟のソファなど数年流浪した後、小会議室でホワイトボードも使いながらの形に落ち着きましたが、レジュメなしの口頭報告という気軽だけれど真剣な形は今も続いています。転出もあり創設者は誰も参加していませんが、新しい参加者に引き継がれ、550回以上の開催を重ねました。悩み深き卵たちの小さな巣はIDEスクエア(TOPIC 14参照)のコラム「途上国研究の最先端」の母体となって、今では日本の知的基盤の一端に成長し、感慨深いです。(町北 朋洋 / 京都大学 東南アジア地域研究 研究所)

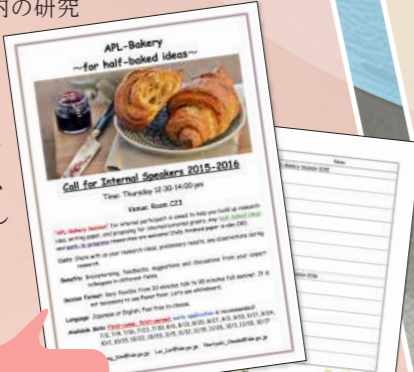


議論の様子

気軽に議論を楽しみたい ～アジ研パワーランチ～

アジ研パワーランチ(APL)は2004年3月にスタートしました。地域研究センターには長い歴史のある「地域研究会」があったものの、より広く気軽に参加でき、ランチを食べながらカジュアルに議論できるような機会をつくり、開発研究センター、新領域研究センターの有志が中心となって立ち上げました。発足のころは当時の藤田昌久所長もよく議論に参加して盛り上げていました。

基本的には木曜日のお昼から午後1時間程度で行っており、気軽にといいつつも、パワーランチの名の如く、カロリー高め「がっつりランチ」のような濃厚な報告・議論も多くみられます。所内の研究者と共同研究をしている外部の研究者の報告があったり、海外の研究者がアジ研に立ち寄った際に最新の研究を報告してくれたり、研究交流の場としても機能してきました。(初鹿野 直美)



APL Bakeryのチラシ

これってどういうこと？ を議論し続けおおよそ30年 ～インドネシア情報交換会～

毎週1回昼休み、インドネシアで「先週何があったか」をメンバーの1人が現地報道をもとに報告しながら雑談する、そんな集まりが1994年からもう28年続いています。会が始まった当時はスハルト政権時代。独裁体制が永遠に続くかのような空気が充満していたところに、一介の主婦だったスカルノ初代大統領の長女メガワティが彗星のごとく野党の党首になりました。もしかしたら何かが始まるかも、と4人ほどのメンバーが毎週集まることにしたのです。実際、インドネシアの歴史はその頃から大きく動き始めました。

会はメンバーが入れ替わりながら、隣国マレーシアの担当者や時には所外の研究者も交えて続いてきました。長続きしているのは、インドネシアがわかりにくいからかもしれません。この出来事はどういう意味なのか、メンバーが情報を出し合うと少し理解が進みます。報告は5～7人の輪番制で、一定量を超えず1時間以内と無理をしないことも大事。毎年、その年の「インドネシア10大ニュース」を決めて、研究所のウェブ上で発表しています。(佐藤 百合)



勉強会の模様

この本を読んでほしい ～アジ研ビブリオバトル～



発表時間は厳守

アジ研ビブリオバトルは2014年の7月から続いている所内イベントです。常川真央さん、川上桃子さん、町北朋洋さんが発起人となって始まり、現在まで特別編を含む計36回開催されました(繁忙期を避けて年6回ほど)。図書館休館日のお昼休みに、図書館円形ホールに集まって3人の登壇者による「イチ押し」の本の紹介(1人きっちり5分間)を聞き、最後に聴衆が「一番読みたくなった本」に手を挙げてチャンプ本を選びます。

本の紹介を通じて「思わぬ人が思わぬ趣味の持ち主だった」とか「じつは自分の文芸的感性に近い同僚がいた」など、嬉しい驚きと知的刺激の連続です。かと思えば普段本を読まないという登壇者が「人生でめずらしく読んだ1冊」を、これ最高！と楽しく紹介してくれたこともあり。ざっくばらんに気取らずに、まさに本を通じて人を知ることができる、これぞビブリオバトルの真髄と言えます。登壇者は研究者だけでなく事務系職員や図書館員まで幅広く、理事や客員さん、外部の方が聞きに来られたことも。登壇しませんか？と声をかけて回るのは幹事団ですが、なぜか研究職より事務職のほうが積極的にやりたいと言ってくるのも面白いところです。部署や世代を超えた「知的交流」の場がこれからも続きますように。(岩崎 葉子)